

野上弥生子とフランク・ヴェデキント (二)

— 『若い息子』と『春の目ざめ』 —

田村道美

一

『若い息子』は昭和七(一九三二)年十二月一日発行の『中央公論』第四十七年第十三号に掲載され、翌八年七月十七日に単行本として岩波書店から刊行された。『若い息子』は、前年に刊行された『真知子』、さらには、彼女の代表作の一つ『迷路』(原型の「黒い行列」は昭和十四年十一月一日発行の『中央公論』第五十一年十一号に掲載された。)と同じく、知的かつ良心的な若者と社会主義との関わりをテーマとしている。したがって、渡辺澄子氏の指摘するように、『若い息子』は『真知子』と『迷路』の「橋渡し」の役割を果たす作品と位置付けることができる。

『若い息子』はともに彌生子の代表作といわれる「真知子」「迷路」の二作品の間期の時期である昭和七年十二月「中央公論」に発表された中篇である。この三つの作品は、昭和初年の左翼思想のシチュエーション・ウント・ドラングのなかに身をおいて苦悩した若い世代の姿を描いたものとしていわば連作ともいえる。「真知子」の主人公真

知子の男性版が「若い息子」の主人公工藤圭次であり、やがて「迷路」の菅野省三へと発展していく。したがって「若い息子」はその書かれた時期からだけでなく「真知子」と「迷路」の橋渡しをなす作品であろうかと思う⁽¹⁾。

ところで、『真知子』と『若い息子』はその主題においてばかりではなく、小説の骨組みを或る西欧文学作品に負っているという点においても共通点を有している。「真知子」がジェイン・オースティンの『高慢と偏見』を下敷きとして書かれた作品であることは、拙稿「漱石と豊一郎・弥生子— *Pride and Prejudice* をめぐって —」⁽²⁾等においてすでに指摘したところである。では、『若い息子』はどのような作品を粉本としているのであろうか。手がかりとなるのは、作品中に見える「メルヒオール」と「ヴェンドラ」という外国語の人名である。

秩父高等学校の学生工藤圭次は社会主義思想に共鳴を覚えながら、自分が最重要視する知識をブルジョア的として軽蔑する学生運動家たちに必ずしも同調できない。ただ、「囃ぬけた頭脳と男らしい冷静な性情」

の持ち主である滝村には一目置いていた。圭次は滝村の求めに応じて、R・S「読書会」に参加し、労働争議支援資金を提供する。その資金を基に滝村はストライキ支持のピラを駅や工場や学校の校庭に撒布するが、まもなく逮捕されてしまう。圭次も資金提供の件は露見しなかったものの、R・Sへ数度参加した廉で逮捕される。しかし、圭次は肺門淋巴腺に異常があるとの理由で七日間の勾留のち釈放される。圭次は転地療養を兼ねて、北軽井沢とおぼしき高原にある貸し別荘で八月を過ごす。その間、圭次は「山の家の日記」と題する日記をつけるが、日記の最後には次ぎのような文章が記されている。

—親愛なメルヒオールよ。今日僕がつひに僕でありえて、君にならなかつたのは、不思議なくらゐだ。

しかしいまの日本の学校や家庭は、僕があゝの瞬間君になつたとしても、おそらく僕を退校させたり、感化院に送つたりはしないであらう。君が不幸にして犯した罪悪は、一冊の書物をひそかに勉強しあふことや、貧しい労働者にパンを買ふに足りる賃金を払はせようではないかと書いた簡単な紙ぎれを撒くことに較べれば、殆んど罪ではないのだから。

同じ意味から、彼女の親たちも彼女がヴェンドラであつた代り、軽井沢のテニス場をうろつき廻る間に、恋からでも、また確乎とした慾情からでもなく、ただほんの暇のもたせる好奇心から—あたかもあの手紙の情人の場合のごとき—碧い眼の赤ん坊の母となるやうな事が生じたとしても、R・Sでも、ピラ撒きでもなかつたと云ふ理由で、父も母もたやすくその恥を忘れ得るだらう。

しかもわれわれ若いものは、今はただ二つの道しか持つてゐない。君のやうに感化院に行くか。或はまた留置場をえらぶか。—³

圭次が「親愛なメルヒオール」と呼びかけている「メルヒオール」と

はフランク・ヴェデキント(Frank Wedekind, 1864-1918)の代表的戯曲「春の目ざめ」(Frühlings Erwachen, 1890)の主人公である。メルヒオール・ガボルはギムナジウム「ドイツの高等中学校」の優秀な生徒である。彼は性にも強い関心を抱いており、第二幕第二場で、親しくなつたヴェンドラ・ベルクマンという少女と乾草棚の上で肉関係を結ぶ。圭次も別荘を訪ねてきた美しい従妹初子と同じやうな関係になりかけるが、辛うじて踏みとどまつたやうである。「君にならなかつた」とはこのことを指している。ところで、弥生子が「若い息子」の中で「春の目ざめ」ないしその登場人物に言及しているのはこの箇所だけである。したがって、「春の目ざめ」を読んだことがない読者には、メルヒオールへ呼びかけたこの箇所は非常に唐突に思えるであろうし、圭次が「今日僕がつひに僕でありえて、君にならなかつたのは、不思議なくらゐだ。」という文章で何を言おうとしているか理解することはできないであろう。では、弥生子はなぜ作品名に言及しなかつたのか。第一の理由として、圭次に「春の目ざめ」の主人公であるメルヒオールよ」と書かせることはひどく不自然であるとの作家的判断が働いたことが挙げられる。第二の理由は、「親愛なメルヒオールよ」という呼びかけの言葉の中に見出せよう。この呼びかけは圭次が「春の目ざめ」に親しんでいたことを示している。それは取りも直さず、弥生子自身がそうであつたことを示している。事実、弥生子は「若い息子」執筆以前に「春の目ざめ」を何度も読んでおり、その内容を自家薬籠中のものとしていたやうである。

【若い息子】が【中央公論】に掲載された昭和七(一九三二)年十二月一日以前に、弥生子が作品や日記の中で「春の目ざめ」に言及している箇所を抜き出してみると次のやうである。

年月日	「春の目ざめ」言及箇所
①大正五年十一月五日	「――何處より來りて何處へ行くを知らず――斯んな聖書の句だの、又『春の目ざめ』の中のヴェンドラとお母様との對話だの、次ぎ次ぎに取り留めもない思ひが頭の中を通り過ぎました。でもそれも一瞬の間で、曾代子は頓てうとうと眠りに落ちました。」「『新しき命』 ⁽⁴⁾ 、二十八頁」
②大正十二年八月二十二日	「明日出立の決心をする。たゞし兄さんは訳しかけの春の目ざめを仕あげてしまふまであることにする。」「『日記一』 ⁽⁵⁾ 、六七頁」
③大正十三年三月二十九日	「岩波さん春の目ざめその他の用事で來訪。」「『二三〇頁』」
④大正十三年四月二十五日	「父さんの春の目ざめの訳文を見る。ウエデキントの才氣煥發は氣もちがよい。里見トン先生のこの頃ねらつたものと比較して見て、うでの牙えを殊にかんずる。こんな材料でちつとも醜悪な氣がしないのが先ず何より大成功むしろ美しいかなしみに打たれる。この清らかな可愛年少者たちを苦しめる性の力が憎くなる位である。女の子どもたちも実に自然にほがらかに描き出されてゐる。大力腕とおもふ。」「『一四〇頁』」

⑤大正十三年四月二十六日	「春の目ざめのつゞきを見、」「『二四一頁』」
⑥大正十三年四月二十七日	「春の目ざめを一緒に見る。すみ。」「『二四一頁』」
⑦大正十三年十一月十二日	「春の目ざめ印税四百四十八円持参。」「『二五八頁』」
⑧大正十四年五月二十三日	「夕方から築地小劇場に『春の目ざめ』を見に行く。(中略)演出はわりにいや味なくあはれに出來た。この劇は取り扱はれた材料から想像されるやうなエロテイクな空氣は醸し出さない。却つて純な美しいものがこの世の暗い不可抗力のもとに、それもをとなく呼ぶ偽善者の誤つた指導に依つて、はかなくおしひしがれて行く悲哀に充ちたものである。讀んだ時よりは見た時の方がなほ氣もちよくかんじられる。これはヴェデキントの手腕だとおもふ。しかし最後の仮面の人の哲学はセンパクなものだ。」「『二四二頁』」
⑨昭和六年三月三十日	「春の目ざめを通読。あんまり参考にはならないらしい。むしろしすぎてはいけなない。」「『二一五頁』」

(傍線引用者)

①の文章は「新しき命」(岩波書店、大正五年十一月五日)収録の短編「新しき命」の最後の一節である。この作品は弥生子が次男(茂吉郎)を出産したときの体験を基にして書かれた短編である。物語の後半は陣痛で病院に入院してから、激しい苦痛のうちに無事男の子を出産するまでの経緯と、見舞いに来てくれた夫との短い会話からなっている。夫は風呂敷の中に入った「一箱の西洋菓子と、色鉛筆の一組と、ブリキ細工の兵隊」を持参する。それは「赤ん坊からのお土産」として、翌日見舞いに来る長男の友雄「決定版では友二」に贈られるはずになっているものである。そして、この短編は次の文章で終っている。

友雄にはいつかその内に小さい赤ん坊が、彼の友達として現はれるかも知れない、と云ふ事が知らされてありました。その赤ん坊は天から来る、而してその時お土産としてお菓子と色鉛筆とブリキ細工の兵隊を屹度持つて来る筈だと豫言されてしたのであります。

「その赤ん坊、天から何に乗つて来るの。」
と云ふ事は友雄の奇抜な空想の対象になりました。鶴、孔雀、雁、鳩、雀、鴉、彼は自分の意識に上の限りの翼あるものを数へて見ました。あの高い空から来るのだとすれば、どれかそんな鳥に乗つて来るより外に方法はないと信じてゐました。(中略)

明日いよいよこの小さい新人を見た時、何處からどうして来た、と尋ねられたら、曾代子は矢張り天から孔雀に乗つて、とても答へなければなりません。嘘をつく積りもなく、欺す積りもないが、今の場合それが一番適當な返事だと思はれます。生成の本源に遡つて人間の運命といふことを深く考へて見やうとすると、曾代子自身にすら、この小さい人間が果して何處から来たのかは、絶対に分り得ないのであります。

—何處より來りて何處へ行くを知らず—
斯んな聖書の句だの、又「春の目ざめ」の中のヴェンドラとお母親

との對話だの、次ぎ次ぎに取り留めもない思ひが頭の中を通り過ぎました。でもそれも一瞬の間で、曾代子は頓てうとうと眠りに落ちました。

この一節に見えるヴェンドラは圭次の「山の家の日記」に記されているヴェンドラと同一人物である。彼女はギムナジウムに通う少女で、十四才になったばかりである。「春の目ざめ」第二幕第二場で、母親のベルクマン夫人は長女のイナに三人目の赤ん坊が生まれたので、ヴェンドラにお祝いの品を持って行くよう命じる。以前からどうして子供が生まれるのか強い好奇心を抱いていたヴェンドラは母親にそのことを訊ねる。ベルクマン夫人は「鶴の鳥が置いて行つた」と答える。しかし、ヴェンドラはそんな話を信じるほど子供ではない。執拗に食い下がるヴェンドラに、ベルクマン夫人はしかたなく「子供の欲しい時はね—男とね—男と結婚をするの・・・愛するんだよ—愛するんだよ。—誰でも一人だけは男を愛することが出来るんだよ! 有りつたけの心をこめて愛するんだよ。さうね—何と云つたらいい、か知ら? (略) お前の年頃ぢやまだ愛することなんぞ出来ないんだよ。・・・ね、分つたね。」と曖昧な答えを与える。「新しき命」の「ヴェンドラと母親との對話」とは特にこの場面におけるヴェンドラとベルクマン夫人のやり取りを指していると思われる。

では、弥生子の読んだ「春の目ざめ」はドイツ語原書、英訳書、邦訳書のいずれであつたろうか。筆者は邦訳書であつたと考える。弥生子の夫豊一郎(雅号は白川)は「春の目ざめ」を「春の目ざめ—少年悲劇—」のタイトルで大正三年六月二十六日に東亞堂書房より刊行している。その「はしがき」に「此の翻譯の完成したのは去年の秋でありました」とある。この「はしがき」は「一九一四年五月 東京にて」書かれたものであるから、「去年の秋」とは一九一三年、すなわち大正二年の秋ということになる。また、弥生子の「新しき命」の最後には「大正二年十

「月」という脱稿年と月とが記されている。次男茂吉郎の誕生年月日が大正二年九月十日であるから、弥生子がこの短編を執筆した時期は大正二年九月十日から十月の間と考えられる。

弥生子の日記は大正十二年七月三十一日から始まっているゆえ、それ以前のことは詳らかでないが、彼女の日記を読むと、彼女が夫の訳した作品を刊行前に読んだり、訳文の校正を手伝ったりしていることが分かる。たとえば、大正十五年七月三十一日の日記に「高慢と偏見の校正をする。ペンバリの郵をエリザベスが見物に行つてゐるとダーシーに出逢ふところである。今まで色んな角度で屈折してゐた二人の關係がいよいよ最後の了解に到しようとする前の最も興味ある場面である。いつもおもふことであるが、長編を書くならこのイキで行かねばならぬ。これで行けば本格小説「で」あると共に、よき意味での通俗小説ともなり得るのである。斯う云ふとありあつかひ方で一つ長いものを書いて見度い⁸⁾。」と記している。弥生子が校正している「高慢と偏見」とは、国民文庫刊行会が大正十四年六月から刊行を開始した「世界名作大観」という名称の世界文学全集のために夫豊一郎が訳したジェイン・オースティンの *Pride and Prejudice* の訳稿（第一章と第四十三章）である。これは一月後の大正十五年八月三十日に「世界名作大観」第一部（英國篇）第八巻、ジェイン・オースチン著、野上豊一郎譯「高慢と偏見」上巻として刊行される。ところで、七月三十一日に弥生子が記している感想「斯う云ふとありあつかひ方で一つ長いものを書いて見度い。」は、彼女の長い作家生活の中でも極めて重要な意味を持っている。なぜなら、この二つの思いが弥生子に初めての長編小説を試みさせることになるからである。その最初の長編小説とは「真知子」であり、そのモデルとなったのが「高慢と偏見」であつたことは言うまでもない。

「高慢と偏見」の場合同様、大正二年の秋に豊一郎が完成した「春の目ざめ」の校正を弥生子が手伝つたことは十分に考えられる。そして、校正を兼ねてこの作品を読んだとき、強い感銘を受け、そのゆえに「新

しき命」の結末で「春の目ざめ」に言及したのである。また、豊一郎は「春の目ざめ」を東亞堂書房から刊行する以前に、雑誌「モザイク」に、明治四十五年七月一日、同年八月一日、大正元年十一月一日の三回に互り「春の目ざめ」を分載していた⁹⁾。弥生子はこの訳も読んでいたであろう。とすれば、彼女は「新しき命」執筆以前に「春の目ざめ」の訳を二度読んでいたことになる。

②は大正十二年八月二十二日の弥生子の日記の一節である。弥生子は大正十二年七月三十一日から八月二十三日まで、家族とともに日光湯元温泉で一夏を過ごした。「兄さん」とは夫豊一郎のことであり、「春の目ざめ」とはフランク・ヴェデキント「春の目ざめ」である。豊一郎は「春の目ざめ」を翌十三年九月二十日に岩波書店から刊行している。その「はしがき」から、豊一郎が大正十二年に「春の目ざめ」を改訳した理由を知ることができる。

一 「春の目ざめ」の翻譯著作權並びに上演權については、私は譯本を出す前の年に、當時ミュンヘンにあつたヴェデキントに手紙で交渉して、それを與へられた。併し私の初めの翻譯は彼の厚意に酬いるに十分なものとは思へなくなつて來た。私はそれを廢棄して新しく作り直さうと考へた。それから暇暇に手を入れたりもしてゐた。終に昨年の夏日光湯元滞在中にこれを仕上げた¹⁰⁾。

豊一郎は十年前の大正三年に刊行した東亞堂書房版「春の目ざめ」の訳文に満足できず、「暇暇に手を入れたり」しながら、「昨年夏」すなわち大正十二年の夏「日光湯元滞在中」に完成させたのである。

③は大正十三年三月二十九日の日記の一文である。「岩波さん」とは岩波書店社主岩波茂雄である。この年の九月二十日に刊行されることになる豊一郎訳「春の目ざめ」等について訪問したようである。

④は大正十三年四月二十五日の日記の一節である。「父さん」とは夫

豊一郎である。「春の目ざめの訳文を見る。」とは九月二十日刊行予定の「春の目ざめ」の訳文を弥生子が校正しているという意味である。「ウエデキントの才気煥発は気もちがよい。」「うでの冴えを殊にかんずる。」「大力腕とおもふ。」から、弥生子が「春の目ざめ」を高く評価していることがわかる。

⑤、⑥により、弥生子が大正十三年四月二十七日に「春の目ざめ」の訳文の校正を完了したことが分かる。なお、この校正により、弥生子は「春の目ざめ」を少なくとも三度読んだことになる。

⑦。すでに述べたように、岩波版「春の目ざめ」は大正十三年九月二十日に刊行された。その初版の印税が四百四十八円であったということであろう。ちなみに、「春の目ざめ」初版の定価は一円六十銭であった。印税が定価の十分の一とすれば、初版発行部数は二千八百部となる。

⑧から、大正十四年五月二十三日に、弥生子が築地小劇場に「春の目ざめ」を見に行ったことが分かる。築地小劇場は大正十四年五月に第二十八回公演作品として「春の目ざめ」を上演している。大笹吉雄によれば、「三人姉妹」(第二十七回公演作品として大正十四年五月初めに本邦初演された)引用者注)の後は竹内良作のメルヒオル、友田恭助のモリッツ、山本安英のヴェンドラ等で「春の目ざめ」(ヴェデキント作 野上豊一郎訳 青山杉作演出)で上演され、大詰に登場する仮面の紳士役は内村喜与作名で小山内薫が演じた(11)。「という。弥生子が五月二十三日に見た「春の目ざめ」はこの第二十八回公演のものであろう。また、この日の日記の一節「これはヴェデキントの手腕だとおもふ。」からも、弥生子がこの戯曲を高く評価していたと知れる。この日の観劇を、読んだ回数に加えるなら、これで弥生子は「春の目ざめ」を実質的には四度読んだことになる。なお、豊一郎訳を用いて「春の目ざめ」を日本で初めては上演したのは「踏路社」(青山杉作、村田実、木村修吉郎の三人が大正六年に結成した劇団)の第三回公演(大正六年九月芸術倶楽部)であった。「青山杉作舞台監督、演出者踏路社、花房静子が

ヴェンドラ、村田実がモリッツ、青山杉作が教師クリーゲントート、岸田辰弥が仮面の人を演じた(12)。「弥生子が踏路社が上演した「春の目ざめ」を見ていた可能性もありうる。

以上の事柄を表にすれば以下の通りである。

年表二

年月日	関連事項
明治四十四年六月一日	野上白川「春の目ざめ」を譯するに先ちて「モザイク」掲載。
明治四十五年七月一日	野上白川譯「春の目ざめ」フランク・ウエデキント(第一幕)、雑誌「モザイク」掲載。
明治四十五年八月一日	野上白川譯「春の目ざめ」フランク・ウエデキント(第二幕)、雑誌「モザイク」掲載。
大正元年十一月一日	野上白川譯「春の目ざめ」フランク・ウエデキント(第三幕)、雑誌「モザイク」掲載。
大正二年八月三日	野上白川「教育会議―春の目ざめ」の或る場面―、「讀賣新聞」掲載。
大正二年秋	野上豊一郎、「春の目ざめ」脱稿。
大正二年十月一日	野上白川「春の目ざめ」の英譯について、雑誌「モザイク」掲載。

大正二年十月	「新しき命」脱稿。
大正三年四月一日	「新しき命」、「青鞥」掲載。
大正三年六月二十六日	フランク・ヴェデキント作、野上白川譯「春の目ざめ—少年悲劇—」(東亞堂書房)刊行。
①大正五年十一月五日	野上彌生子「新しき命」(岩波書店)刊行。
大正六年九月	野上白川譯「春の目ざめ」、踏路社の第三回公演として上演。
②大正十二年八月二十二日	「明日出立の決心をする。たゞし兄さんは訳しかけの春の目ざめを仕あげてしまふまであることにする。」
大正十二年夏	豊一郎、「春の目ざめ」の改訳脱稿。
③大正十三年三月二十九日	「岩波さん春の目ざめその他の用事で来訪。」
④大正十三年四月二十五日	「父さんの春の目ざめの訳文を見る。」弥生子、夫の訳文を校正。
⑤大正十三年四月	「春の目ざめのつゞきを見、」夫の訳文の校正

二十六日	の続き。
⑥大正十三年四月二十七日	「春の目ざめを一緒に見る。すみ、」夫の訳文の校正完了。
大正十三年九月二十日	フランク・ヴェデキント、野上豊一郎譯「春の目ざめ—少年悲劇—」(岩波書店)刊行。
⑦大正十三年十一月十二日	「春の目ざめ印税四百四十八円持参。」
大正十四年五月	野上豊一郎譯「春の目ざめ—少年悲劇—」、築地小劇場の第二十八回公演として上演。
⑧大正十四年五月二十三日	「夕方から築地小劇場に「春の目ざめ」を見に行く。」

二

次に、年表一の最後の⑨について見ていきたい。大正十四年五月二十三日、築地小劇場に「春の目ざめ」を観劇に行ってから七年後の昭和六年三月三十日の日記に、弥生子は「春の目ざめを通読。あんまり参考にはならないらしい。むしろしすぎてはいけない。」と記している。この「春の目ざめ」とは夫の訳した岩波版「春の目ざめ」であろう。では、何の参考にしようとして「春の目ざめ」を読んでいるのだろうか。昭和六年三月三十日前後の日記を見ると、弥生子が新たに或る作品の執筆を思い立ち、その構想を練り始めたことが分かる。

年月日	【若い息子】関連事項
昭和六年三月二十一日	「 <u>今頭の中にある仕事はい、かげんには着手されない。十分の用意をもつて完成し度い。</u> 」 「 <u>日記三</u> 」(B)、二二〇頁
昭和六年三月二十六日	「 <u>ロシアもの、ドラマを少しよんで見た。頭の中にあるものの参考にとおもつて。あんまり感心出来ない。</u> 」二二二頁
⑨昭和六年三月三十日	「 <u>春の目ざめを通読。あんまり参考にはならないらしい。むしろしすぎてはいけない。</u> 」二二五頁
昭和六年五月十二日	「 <u>ぼつぼつなにか書きはじめ度い。</u> 」二四一頁
昭和六年五月十五日	「 <u>久しぶりにドイツ語のべんきよう。これを怠らずつっけようとおもひながら連続できない。書き度いものが頭の皮一重したにあるためである。そのくせまだそれは筆に下されるほど十分な醗酵は遂げてゐない。</u> 」二四四頁
昭和六年 六月三日	「 <u>書斎の新しい机と椅子で新しく書きはじめて見度く、はじめたが、からん！からん！からん！と云ふ一行しか出来ない。</u> 」二六〇頁

昭和六年六月三日の日記にある「からん！からん！からん！」は「若い息子」の書出しである。したがって、昭和六年三月二十一日以降の日記に記されている「頭の中にある仕事」「書き度いもの」等が「若い息子」を指すことは明らかである。また、すでに見たように、「春の目ざめ」は昭和初期の高等学校における学生運動を描いた作品である。弥生子が「若い息子」の構想を得たと思われる昭和六年三月二十一日以前の日記を見ていくと、一ヶ月前ほどから、弥生子の次男茂吉郎の通う東京高等学校が学生騒動で大揺れであったことが分かる。

年表四

年月日	【東高の騒動】及び【若い息子】関連事項
昭和六年一月十九日	「この頃は午前は真知子の直しに費やしてゐる(略)」 このごろ自分の最も深い関心事はモキ「茂吉郎」の学校のことである。三年生の数名が暮れの市電のさわぎにピラまきをし、それからたぐり出されて代、幡署にあげられてゐる。それに対する学校の態度が露骨に官僚的で不親切をきはめてゐる。モキが毎日学校から帰るとそれにつきいろいろ土産話をしてくれる。 クラスから委員をえらび、寄附金をつものり、それでさし入れものをしてやり逢ひに行つたら泣いてゐたと云ふ。それをきいた時涙がながれて仕方がなかつた。

	<p>若い友だちがそれほど友情をつくすのをよそに見て、それに対してどこまでも面倒を見てやつてよい筈の生徒主事等が、学校の恥をさらしたものとして敵視するのはなんと誤つた了見であらう。主事等は今度の事件によつて完全に生徒の信頼を失ふであらう。彼等が口でこれまでといった道徳的な言葉がすべて空な言葉であつたことを生徒に教へるであらう。」〔「日記三」、一七二―三頁〕</p>
<p>昭和六年二月二十一日</p>	<p>「東高の処分学生五十三名、うち退学一名、諭示退学十三名、あとはキンシン。この処分は過酷であり、また不公平である。(略)</p> <p>東高は斯んな事情にまで切逼しても中々ストライキまでには行かないらしく、ひとびとが簡人主義であるのと尋常科といふものが可なり手足まどひである。その日のピラまきの時でも、あゝ、怖かつた!と云つてゐる程度の子どもが多いのだから。」〔一九〇―一頁〕</p>
<p>昭和六年二月二十五日</p>	<p>「東高の卒業生山口安雄氏の訪問を受ける。今度の処分を緩和するため父兄たちの運動を起さうとするにつき、発起人として父さんの名前をかりに来たのである。</p> <p>〔欄外二〕文三乙と丙はストライキをはじめた由、モキの組で決を取つたところ十対十四でストライキを否決され結果が出来ないとのこと。この際はむしろやるべきである。」〔一九五</p>

<p>昭和六年三月二日</p>	<p>頁</p> <p>「東京高等の一部ストライキ解決。(略)原因であつた退学生徒に関する件は先輩に一任といふことになつた由。</p> <p>新しき道徳。ストライキ。とにかく、ゼネ・ストに出来なかつたのは、東高の生徒の恥辱である。」〔一九九頁〕</p>
<p>昭和六年三月二十一日</p>	<p>「今頭の中にある仕事はい、かげんには着手されない。十分の用意をもつて完成し度い。」〔二一〇頁〕</p>
<p>昭和六年六月三日</p>	<p>「書齋の新しい机と椅子で新しく書きはじめて見度く、はじめたが、からん!からん!からん!と云ふ一行しか出来ない。」〔二五九―二六〇頁〕</p>
<p>昭和六年六月四日</p>	<p>「書きかけのものがまだ本調子に行かず。一つにはこれの発表に不安があるからである。モキたちの気もちを損んじてまで発表は出来ない。しかしとにかくこれを書いてしまはなければ、他のどんな仕事も出来ないほどこの一つのテーマは現在の私を補へている。発表が出来なければ出来ないまでとし、とにかく書きつけることにしよう。」〔二六〇頁〕</p>

(傍線引用者)

「野上彌生子全小説 六」 「大石良雄・若い息子」 (岩波書店、一九九七年) に付された宇田健氏の「解題」によれば、昭和五年一月の高等学校長会議で、左翼学生取締、思想善導、穩健な研究団体育成の申し合せがあり、同年二月から三月にかけて、四高・山形高・水戸高・福岡高・八高・静岡高で生徒の処分が行われ、翌六年二月には、弥生子の日記にもあるように、東京高校で五十三名の学生が処分された⁽⁴⁾。具体的な経緯は詳らかでないが、二月二十一日の日記に、「この処分は過酷であり、また不公平である。」と記しているように、弥生子は東京高校の処分に強い憤りを感じている。その憤りから、二十五日の日記には「この際は「ストライキを」むしろやるべきである。」と学生に強硬な姿勢を望み、三月二日の日記には「ゼネ・ストに出来なかつたのは、東高の生徒の恥辱である。」と、失望感を露にしている。そして、弥生子は東京高校当局と学生との対立の推移を見つめながら、その対立を「春の目ざめ」のそれと重ね合わせていたと考えられる。

三

「春の目ざめ」は、年少少女たちの自然な「性の目ざめ」を親や教師たちが不自然に抑圧し、それによって年少少女の性に対する好奇心を歪めたり、不要な罪悪感を抱かせ、最終的に彼等を不幸にしていることに抗議しようとした作品である。弥生子も大正十四年五月二十三日に築地小劇場公演の「春の目ざめ」を見て、同日の日記に、「をとなど呼ぶ偽善者の誤つた指導に依つて、「純な美しいものが」はかなくおしひしがれて行く悲哀に充ちたものである。」と記している。「春の目ざめ」の内容を熟知していた弥生子は、年少少女の「性の目ざめ」とそれを抑圧しようとする学校当局との対立の代わりに、「思想の目ざめ」とそれを弾圧する学校当局との対立をテーマとすることにより、昭和初期の日本の良心的で正義感の強い若者の社会主義への目覚めを効果的に描くこと

ができると考えたのであろう。このように「春の目ざめ」を換骨奪胎して「若い息子」が生まれた。

「若い息子」執筆に際して、弥生子が「春の目ざめ」をどのように参考にしたか、冒頭部、クライマックス、結末の三箇所を絞って具体的にみていくこととする。

「春の目ざめ」は、メルヒオルとヴェンドラの物語が交互に縋い合わされた構成になっている。たとえば、第一幕第一場はヴェンドラと母親との会話からなり、第一幕第二場はメルヒオルとモリッツの散歩中の会話、第一幕第三場はヴェンドラと友人との会話、第一幕第四場はギムナジウムの前の遊園地でのメルヒオルとモリッツやその他の友だちとの会話からなっている。

これに対して、「若い息子」では、メルヒオルに相当する工藤圭次の物語に焦点が絞られている。したがって、「若い息子」の第一章は圭次の学ぶ学校の教室の場面から始まり、この章の大部分は滝村と工藤圭次の散歩中の会話で占められている。滝村と圭次の散歩中の会話は、「春の目ざめ」第一幕第二場のメルヒオルとモリッツの散歩中の会話を念頭に置いて構想されたと考えられる。

会話の内容について見ると、「春の目ざめ」第一幕第二場では、成績不良者のモリッツがメルヒオルに対して、落第への不安や自慰乃至夢精の経験とそれに伴う罪悪感から生じる死の恐怖について語る場面が中心となっている。メルヒオルは 'facts of life' について記したノートをモリッツに手渡すと約束する。これによって、メルヒオルが「性」に関しては、モリッツより優位に立っていることがわかる。

「若い息子」第一章では、滝村の圭次に対するR・Sへの参加要請と、R・S参加に踏み切れない圭次がその理由を説明するやり取りからなっている。ここでは「思想の目ざめ」にともなう圭次の苦悩に焦点が合わされている。弥生子は「春」に「性の目ざめ」と「左翼的思想の目ざめ」を換骨奪胎することを思いつき、「若い息子」を構想したと先に指摘し

だが、この指摘の妥当性は、「春の目ざめ」第一幕第二場と「若い息子」第一章の各々の会話内容からも裏付けられよう。また、「左翼思想」に関して、滝村が優越者であることが示されている。したがって、滝村との関係において、圭次はモリッツの位置にいることになる。このように、弥生子は「若い息子」において、社会主義運動に飛び込むべきか否かと逡巡する人物を主人公としている。この点において、「真知子」のヒロイン、真知子も同様であり、両作品の主人公像に共通点を見出すことができる。なお、滝村はこれ以降、主として、会話の中や圭次の意識の中に現れ、作品の表舞台にはあまり登場して来ない。したがって、二章以降では、圭次が主人公としてメルヒオルの役割を担うことになる。

「若い息子」のクライマックスは、第六章である。この章では、学生たちがアジトで関東金属組合C町支部支援のピラを作成し、早朝に鋳物工場や駅や秩父高校の校庭にピラを撒くというゲリラ行動に出る。学校の小使がピラを発見し、学校の教師たちは大いに動揺する。これに対して、「春の目ざめ」のクライマックスは、第三幕一場である。この場面では、ギムナジウムの会議室でモリッツの自殺を知った学校当局が、宗教教育省にこの事件を知られと、学校が一時閉鎖されるのではないかと恐れ、動揺する様子が描かれている。また、メルヒオルがモリッツに挿絵入りの「Der Beischlaf」(=coitus, sexual intercourse)と題するノートを送ったことが露見し、メルヒオルは感化院送りとなる。「若い息子」でも、R・Sに参加していたとして圭次は留置所へ送られる。このように、二つの作品のクライマックスとなる事件は各々の主人公を同じような境遇へと至らせることになる。

それでは、両作品の結末はどうか。「若い息子」の最終章である第八章の前半では、圭次が一ヶ月の謹慎処分後、寮生活を始め、退学者の復学運動の主導者として活躍を開始する姿が描かれる。学校当局は圭次のこの行動に強い不快感を抱き、圭次の主任教授を圭次の母親の

許に赴かせ、学校は断じて復学は許さない方針ゆえ、復学運動が進展して盟休となれば、圭次は首謀者として嚴重な処分を免れないであろうと警告させる。その後、母親は生徒主事から電話を受け、学生たちが学生大会を開催し、事件は重大化し、盟休は免れない事態に至ったゆえ、圭次を至急呼び返してほしい旨の要請を受ける。母親は教師の強い要請を受け、親戚の一人が危篤ゆえ至急家に戻るようとの電話を寮に入れ、圭次を家に呼び戻す。母親は復学運動を止めるよう嘆願するが、圭次は母親の嘆願を振り切って、ストライキへ突入して行く。

「春の目ざめ」の最後(第三幕七場)の場面は墓地である。その墓地に、感化院を脱走したメルヒオルが逃げて来る。彼はヴェンドラの墓に気がつき、自責の念に駆られる。(墓には「萎黄病にて死亡」の文字が刻まれているが、彼女は医者に飲まされた墮胎剤がもとで亡くなったのである。)すると、メルヒオルの目の前に自殺したモリッツの亡霊が現れ、しきりに握手を求め、これは「死の誘惑」を意味している。先程見たように、「若い息子」の最終章では、母親がストライキをやめるようにと圭次に嘆願する。母親のこの嘆願は「(ストライキという)行動放棄への誘い」であると看做すことができる。このように、両作品の最後の場面にも、主人公が死や行動放棄といったネガティブなものへ誘われるという共通項を認めることができる。また、圭次が母親の嘆願を振り切ってストライキへ突入して行くという結末は、「春の目ざめ」において、「分別と生」を象徴する「仮面の紳士」との会話を通して、メルヒオルが「死の誘惑」を断ち切り、分別と生きる力を獲得するという結末に対応している。

ところで、弥生子は「若い息子」を描くに際して、「春の目ざめ」が正面切って描こうとした思春期の性の問題をまったく無視した訳ではない。「春の目ざめ」のヒロイン、ヴェンドラ・ベルクマンを念頭に置いて造型された初子を通して、弥生子は思春期の性を取り上げている。初子は圭次より一つ年下の美しい少女である。彼女は女学校を卒業したと

ころであるが、健康上の懸念から進学せず、また家が裕福で働く必要もなかった。自宅と軽井沢の別荘の間を行き来しながら退屈な日々を送っている。初子はその退屈な日々から逃れるため、見知らぬ男性と手紙のやり取りをしている。第三章で、初子は圭次と赤羽の駅で待ち合わせ、自分の秘密を打ち明ける。そして、「見知らぬ男性と手紙のやり取りをしている。次の土曜日、日比谷公園である音楽会で会いたいと言ってきた。どうすべきか。」と助言を求める。これが、二人が作品の中で初めて一緒に登場する場面である。この場面は、「春の目ざめ」第一幕第五場で、メルヒオルとヴェンドラとが森の中で出会い、初めて口をきく場面に対応している。

【若い息子】第七章（「圭次の日記」）で、北軽井沢と思われる貸別荘で肺門淋巴腺の療養をしている圭次を初子が訪ねて来る。散歩中に夕立ちに会い、二人は炭焼小屋へ飛び込む。間もなく、圭次が小屋から飛び出して来る。この場面は、「春の目ざめ」の第二幕第四場に対応している。ここでは、早熟で、性についても十分な知識を得ていたが、実体験はなかったメルヒオルがヴェンドラと関係を結ぶ場面である。

以上から、弥生子が【若い息子】の登場人物の性格像、その人間関係、物語の展開等について、「春の目ざめ」をかなり参考にしたことは明らかである。瀬沼茂樹は角川文庫版【若い息子 他二篇】の「解説」で、この作品が「多分に明快な物語的な叙述法¹⁵⁾」をとっていると述べているが、これも【若い息子】が【春の目ざめ】を粉本としているためにはかならないと考えられる。

最後に、両作品の対応関係表を次に掲げておく。
〔なお、本稿は日本比較文学会第四十回記念関西大会で口頭発表した原稿を加筆修正したものである。〕

【春の目ざめ】と【若い息子】との対応関係表

【春の目ざめ】	【若い息子】
第一幕第一場 ベルクマン家の居間 ヴェンドラ、十四歳になる。母親は「大人になった印」として、丈の長いスカートををはかせるが、ヴェンドラは不満。	第一章 放課後 滝村と工藤圭次の散歩中の会話。 滝村は圭次にR・Sへの参加を要請する。
第一幕第二場 戸外（日曜の夕方） メルヒオルとモリッツの散歩中の会話。 成績不良者モリッツの落第への不安。自慰の経験と死の恐怖。 メルヒオル、'facts of life'について記したノートをモリッツに手渡すと約束する。 * 「性の目ざめ」にともなう苦悩。	圭次はR・S参加に踏み切れない理由を説明する。 * 「社会主義思想の目ざめ」にともなう苦悩。
第一幕第三場 市外（洪水の後の日） ヴェンドラと友人との会話。 「赤ん坊はどうして出来るのか。」	

<p>第一幕第四場　ギムナジウムの前の遊園地</p> <p>モリッツはメルヒオルたちに、「成績簿を盗み見て、進級できることを知った。落第であれば、自殺するつもりだった。」と語る。</p>	<p>第一幕第五場　森の中（日の照っている午後）</p> <p>メルヒオルとヴェンドラが森の中で出会う。</p> <p>ヴェンドラは貧しい人々に施しをするのが好きだと語る。また、友人のマルタ・ベッセルが毎晩父親にぶたれていることへの同情を示す。</p>	<p>第二幕第一場　メルヒオルの書斎（夜）</p> <p>モリッツは両親を悲しませたくないゆえに、必死で試験勉強をしていると語る。</p>	<p>第二幕第二場　ベルクマン家の居間</p> <p>ヴェンドラは子供が生まれる訳</p>
	<p>第三章</p> <p>圭次と初子は赤羽の駅で待ち合わせる。初子は秘密（見知らぬ男性と手紙のやり取りをしていること）を打ち明ける。その男性が次の土曜日に会いたいと言ってきたが、どうすべきかと圭次に助言を求める。</p>		

<p>を母に訊ねる。</p> <p>第二幕第三場　室内</p> <p>ヘンスヘン・リフロが自慰後に自責の念にかられる場面。</p>	<p>第二幕第四場　乾草棚</p> <p>早熟で、性についても十分な知識を得ていたが、実体験はなかったメルヒオルがヴェンドラと関係を結ぶ場面。</p>	<p>第二幕第五場　室内ガボル夫人はモリッツ（落第した）のアメリカ行きの費用を工面してほしいとの要請を断る手紙を認める。</p>	<p>第二幕第六場　花園（朝の日光の中）</p> <p>ヴェンドラの独り言。</p>	<p>第二幕第七場　川に近い草原の小路（夕闇）</p> <p>モリッツとイルセ（モデル女）との会話。その会話の中でモリッツの自殺が暗示される。</p>
	<p>第七章「圭次の日記」</p> <p>初子の訪問。散歩中に夕立ち。炭焼小屋へ飛び込む。</p> <p>圭次、間もなく飛び出して来る。</p>			

<p>第三幕一場 ギムナジウムの会議室</p> <p>モリッツの自殺後の学校での議論。学校当局は宗教教育省に知られるのを恐れる。</p> <p>メルヒオルがモリッツに挿絵入りの「Der Betschlar」と題するノートを手渡したことが露見する。</p>	<p>第六章</p> <p>早朝、学校の小使が校庭に撒かれたピラを発見する。</p> <p>この「事件」を聞いて、学校の教師たちは激しく動揺する。</p> <p>*「ノート」と「ピラ」の類似性。(結果的に、メルヒオルは感化院送りとなり、圭次は留置所へ入れられる。)</p>
<p>第三幕二場 墓地の墓穴の前(雨)</p> <p>牧師、校長、モリッツの父親、伯父たちは死んだモリッツを避難する。</p> <p>イルセとマルタの二人だけがモリッツの墓に花を手向ける。</p>	<p>第八章</p> <p>父親は圭次の引き起こした事件をすべて母親の責任とし、自分の名誉と威信が傷つけられたと妻を責める。</p>
<p>第三幕三場 室内</p> <p>ガボル夫妻の会話。夫(判事)は妻の教育方針が子供を甘やかすものと否定し、メルヒオルの書いた例のノートは彼の精神的腐敗を証するものと断ずる。</p>	<p>第七章「圭次の日記」</p> <p>「高原の家」(軽井沢より約一五〇メートル高い貸別荘)で、</p>
<p>第三幕四場 感化院の廊下</p> <p>メルヒオルは脱走のプランを練る。</p>	<p>第七章「圭次の日記」</p> <p>「高原の家」(軽井沢より約一五〇メートル高い貸別荘)で、</p>

<p>第三幕五場 ヴェンドラの寝室</p> <p>医者が母親にヴェンドラの妊娠を告げる。</p> <p>ヴェンドラはなぜ性についてすべてを話してくれなかったのかと母親を非難する。</p>	<p>肺門淋巴腺の治療に専念。</p>
<p>第三幕六場 葡萄畑(夕方)</p> <p>エルンストとヘンストンの接吻の場面。</p>	
<p>第三幕七場 墓場(十一月の深夜)</p> <p>感化院を脱走したメルヒオルが墓地に逃げて来る。</p> <p>ヴェンドラの墓を見る。</p> <p>モリッツの亡霊が現れ、握手を求め。(「死の誘惑」)</p> <p>「仮面の紳士」(「分別と生」)が登場。モリッツに消えるよう命じる。メルヒオルはこの紳士と話し合っているうちに、次第に分別を与えられ、生きる力を得る。</p> <p>*モリッツの握手 死への誘い</p>	<p>第八章</p> <p>一ヶ月の謹慎処分後、圭次は寮生活を始める。復学運動の主導者として活躍を開始。</p> <p>母親は教師の強い要請を受け、圭次を家に呼び戻し、復学運動を止めるよう嘆願する。</p> <p>しかし、圭次は教授の警告や母親の嘆願を振り切って、ストライキへ突入して行く。</p> <p>*母親の嘆願 行動放棄への誘い</p>

【注】

- (1) 渡辺澄子『野上彌生子研究』（八木書店、昭和四十四年）、一五九頁。
- (2) 田村道美「漱石と豊一郎・弥生子— *Pride and Prejudice* をめぐって—」（香川大学教育学部研究 報告）第一部第八十四号、平成四年一月）所収。同「野上弥生子と「世界名作大観」（五）—「高慢と偏見」上巻—」（香川大学教育学部研究報告）第一部第九十三号、平成七年一月）。同「野上弥生子とスタンダール—「真知子」と「赤と黒」—」（香川大学教育学部研究報告）第一部第一〇五号、平成十年十二月）。
- (3) 『野上彌生子全集』第六卷「小説六」（岩波書店、一九八一年）、一七〇—一頁。
- (4) 野上彌生子「新しき命」（岩波書店、大正五年十一月五日）。
- (5) 『野上彌生子全集』第二期第一巻「日記一」（岩波書店、一九八六年）。
- (6) 野上彌生子「新しき命」、二七—八頁。
- (7) 野上白川譯「春の目ざめ—少年悲劇—」（東亞堂書房、大正三年）、一二—二頁。
- (8) 『野上彌生子全集』第二期第一巻「日記二」、四一—二頁。
- (9) 昭和女子大学近代文学研究室編『近代文学研究叢書』第六十七巻「森田草平・野上豊一郎・草村北星・白柳秀湖」（昭和女子大学近代文学研究所、平成五年）、「野上豊一郎著作年表」、一五三—四頁。
- (10) 野上白川譯「春の目ざめ—少年悲劇—」（岩波書店、大正十三年）、「はしがき」、一—二頁。
- (11) 大笹吉雄「日本現代演劇史 大正・昭和初期編」（白水社、一九八六年）、四八九頁。
- (12) 大笹吉雄「日本現代演劇史 明治・大正」（白水社、一九八五

年）、三二二—三頁。

- (13) 『野上彌生子全集』第二期第三巻「日記三」（岩波書店、一九八七年）、二一〇頁。
- (14) 『野上彌生子全小説六』「大石良雄・若い息子」（岩波書店、一九九七年）、「解題」、二七〇頁。
- (15) 野上彌生子『若い息子 他二篇』（角川文庫、昭和二十八年）、「解説」、一九九頁。

Abstract

Wakai Musuko (*The Young Son*), one of the masterpieces of Yaeko Nogami's novels written before World War II, deals with the relationship between an intellectual and conscientious young man and socialism. As Sumiko Watanabe points out, Keiji Kudo, the hero of *Wakai Musuko*, is the male version of *Machiko*, the heroine of *Machiko*. The two novels have another thing in common. This is the fact that *Wakai Musuko* is written based on a European literary work, just as *Machiko* is based on Jane Austen's *Pride and Prejudice*. The literary work is Frank Wedekind's *Frihlings Erwachen*.

In this paper, the characters, plots and themes in *Wakai Musuko* and *Frihlings Erwachen* are compared and it is demonstrated that the former is an adaptation of the latter: Yaeko Nogami changed the theme of *Frihlings Erwachen*—conflict between the young people's sexuality and the school authorities trying to suppress this natural sexual desire—into the conflict between young intellectuals awakening to socialism and the school authorities ruthlessly oppressing the socialist movement. By the adaptation she is successful in depicting effectively the internal and external struggles of intellectual young people with a strong sense of justice in the early Showa era.